

20260217野上先生レッスン

1 基礎合奏

野上先生の指導内容に基づき、基礎練習の現状、課題、そして今後の取り組みへのアドバイスをまとめました。

1. 基礎練習の現状

現在の基礎練習は、メニューをこなすことが目的となる「形骸化」の傾向が見られます。

- ルーチン化と目的の喪失: 毎日同じメニュー(牛乳パックを使った練習、リップスラー、スケールなど)をこなしてはいるものの、「何のためにやっているのか」という目的意識が薄れ、形だけで終わっている側面があります。
- 「サクサク」進む練習: 練習が流れ作業のように早く進んでしまい、一つひとつの音や動作に対して、昨日と比べてどうだったかという振り返りや共有が不足しています。
- 楽器間の意識の差: 基礎合奏中、自分が吹いていない待ち時間に、他のパートの音を聴いたり準備したりする時間を有効に活用できていない現状があります。

2. 課題

技術面および意識面で、いくつかの具体的な課題が指摘されています。

- 呼吸とアンブシュアのコントロール: 息を入れることに意識が行き過ぎて口が締まってしまったり、逆にフォルテで吹く際にアパチュア(唇の開き)が広がりすぎて音が荒れたりしています。
- 「ワンプレス」の維持: 練習中に途中で息を吸ってしまうことが多く、一息で吹き切るための省エネな奏法や、効率的な振動ができていません。

ワンプレスで吹き切るための「省エネ奏法」の最大のコツは、**「振動の効率を上げ、息の消費量を最小限に抑えること」**です。

野上先生の指導内容に基づいた具体的なポイントは以下の通りです。

1. ピアノ(弱奏)でのコントロールを磨く

ワンプレスで長いフレーズを持たせるには、音量を落とすことが不可欠です。

- 「ピアノで練習できないと、この練習(ロングトーンなど)は成立しない」と言われるほど、小さな音でコントロールする技術が省エネに直結します。

- 自分一人が一息で持たせられる「最大音量」を知り、必要に応じて音量をセーブする感覚を養ってください。

2. 「振動効率」を意識する

息をたくさん入れること＝良い音ではありません。

- 少ない息でもリードやくちびるを効率よく振動させる、**「振動効率を上げる」**練習が必要です。
- 「息の量」に頼らず、効率的な振動を追求することで、結果として楽に(省エネで)吹けるようになります。

3. 楽器の特性(抵抗感)を理解する

楽器によって息の使い方が異なります。

- トロンボーンやフルートなど、吹奏時の抵抗が少ない楽器は、意識しないと無駄に息が漏れ出てしまいがちです。
- これらの楽器は、特に「無駄に息を出さない」という意識を持って、省エネ奏法を実践する必要があります。

この「省エネ奏法」を身につけると、基礎練習だけでなく、曲の中の長いフレーズも格段に吹きやすくなります。

- 息のスピードの不一致: 音程や音色は意識していても、アンサンブルの根幹となる「息のスピード」を周囲と合わせる意識が足りません。
- リズムとアーティキュレーションの乱れ: スケール練習などでリズムが不安定になり、スタカートやスラーの解釈が個人でバラバラなため、音が混ざり合っていません。

3. 今後の取り組みへのアドバイス

2月・3月は新入生を迎える前の「一番の勝負所」であり、自分たちの土台を作り直す絶好の機会です。

- 目的の再定義: 「肺の活性化」や「筋肉の使い方」など、その練習が何を目指しているのかを常に考察し、アプローチを変えていくことが大切です。
- 評価と共有の徹底: 練習を始める前に「今日は何を注意するか」を確認し、終わった後に「昨日と比べてどうだったか」を互いに評価し合う時間を設けてください。
- 「聴く」練習の強化: 自分が吹いていない時こそ、相手の音色や「息のスピード」を観察してください。弦楽器が弓のスピードを合わせるように、管楽器も息のスピードを合わせることで響きが揃います。

待ち時間に他のパートの音を聴く際、最も注目すべきは**「息のスピード」と「相手のキャラクター(吹き方の癖)」**です,,。

野上先生の指導に基づいた、具体的な注目ポイントを整理しました。

1. 「息のスピード」を感じ取る

管楽器において、弦楽器の「弓のスピード」に相当するのが「息のスピード」です,。

- 視覚ではなく感覚で聴く: 弦楽器のボウリング(弓の動き)は目に見えますが、息のスピードは見えません。だからこそ、耳でそのスピード感を察知し、自分が入る時にそのスピードに合わせる意識が重要です,。
- 響きを揃える鍵: 同じピッチ(音程)であっても、息のスピードがバラバラだと音は混ざりません。相手がどのような速さの息で音を鳴らしているかに集中してください,。

2. 相手の「キャラクターや癖」を知る

同じ部活の仲間がどのような音を出し、どのようなタイミングで吹くのか、その「手の内」を知る絶好のチャンスです,。

- 駆け引きの準備: 「この人はここで小さくなるな」「この人はこういう音色で来るな」というキャラクターを把握することで、自分が吹く時に「相手が小さいから自分も抑えよう」といった**高度な駆け引き(気配り)**ができるようになります。
- 独りよがりの脱却: 自分の練習だけでいっぱいになり、周りの音の出し方を観察することで、バンド全体の「引き出し」を増やすことができます。

3. リズムの「パルス」とアーティキュレーション

- ビート感の共有: 他のパートが刻んでいるリズムの「裏拍」や「グルーヴ感」に注目してください。ここが揃っていないと、後で合奏した時に音が混ざり合わなくなります,。
- 音の長さの解釈: スタッカートやスラーの長さ、切り方を他のパートがどう処理しているかを聴き、自分のパートとの違いを確認しておきます。

野上先生は、**「吹いていない5分、6分の時間をただ待つのはもったいない」**と仰っています,。この時間に相手の音を徹底的に「観察」することが、合奏の質を一段階上げる近道になります。

次の合奏や基礎合奏の待ち時間に、まずは**「隣の人の息のスピード」**を想像することから始めてみてはいかがでしょうか？

- ピアノ(弱音)でのコントロール: ピアノでしっかり一息で持たせる練習をすることで、振動の効率を上げ、結果としてフォルテの質も向上します。
- 基礎と曲のリンク: 基礎練習で出している音と、曲で出したい理想の音を切り離さず、常に「曲に活かせる基礎」を意識してください。

2 科戸の鵲巢

野上先生の指導に基づき、『科戸の鵲巢』の合奏における重要なポイントを、表現面、技術面、そして楽器ごとの具体的な指示に分けてまとめました。

この曲は新人戦でも取り組んだ曲ですが、現在はその「基本形」ができています。ここからさらに「譜面通り」を徹底し、再構築することで、演奏をバージョンアップさせることが求められています。

1. 音楽的な表現とエネルギー

- 推進力とエネルギーの方向: 曲の冒頭から中盤にかけて、後半に向かっていくためのエネルギーが必要です。ただテンポ通りに吹くのではなく、風が吹き抜けるようなスピード感や推進力を意識してください。
- 「箸休め」の必要性: 常に「ゴージャス」で強すぎる演奏(ステーキをずっと食べ続けるような状態)は、聴き手を疲れさせてしまいます。音楽の変化(ダイナミクスの落差)をつけ、ホッとできるような繊細な部分(箸休めやおしんこ)を大切にしてください。
- 17小節からのイメージ: 「来愁(らいしゅう)漂う」イメージで、遠くから音が浮かび上がってくるように演奏してください。

2. ダイナミクスとアーティキュレーション

- ピアノ(弱奏)の徹底: 100小節付近など、作曲者の意図として「消えていくように」極限まで小さく、繊細に演奏する場面があります。ピアノを効果的に使うことで、バンド全体の響きがより素敵になります。
- ロング・クレッシェンド: 14小節のピアノッシモから53小節のフォルティッシモまで、非常に長い時間をかけて盛り上げる必要があります。早くやりすぎず、全体のバランスを考えてコントロールしてください。
- フォルテピアノ(**fp**)の処理: 6小節や30小節などのフォルテピアノは、どのくらいの長さフォルテを維持するか(16分音符か、8分音符か)をパート内で揃えることが重要です。現状では8分音符程度を意識し、響きを残す工夫が必要です。

3. セクション・楽器別の課題

- 低音セクション(243小節～): テーマを吹く際は、音が立ちすぎないように注意してください。弦楽器のチェロやコントラバス、ファゴットのような、丸みのある豊かな音色が理想です。
- 打楽器(パーカッション):
 - 167小節以降のウッドブロックなどは、単にフォルテで叩くのではなく、指定されたメゾピアノやメゾフォルテの色合い(グラデーション)を表現してください。
 - チャイムは、音が遅れないよう短めに、かつ最後に向けてクレッシェンドしていくような工夫が必要です。
- 金管楽器: 54小節の頭のような場面では、ブレスの種類(鋭く早いブレスか、ゆっくりか)を揃え、インパクトの瞬間を「ホームランを打つとき」のように引きつけて合わせる意識を持ってください。

4. 今後の練習へのアドバイス

- 「聴く」ことの強化: 自分が吹いていない時間こそ、他のパートの音や「息のスピード」を観察してください。
- テンポの主体性: 指揮を「見すぎる」のではなく、自分たちでテンポを作り出す意識が必要です。

打楽器の音色のグラデーションやバランスを改善するための具体的な対策

「譜面に書かれたダイナミクス(強弱記号)を厳密に守り、音量の色彩感(グラデーション)を表現すること」に尽きます。

野上先生の指導に基づいた、具体的な改善策は以下の通りです。

1. 「全部フォルテ」からの脱却

現在、ウッドブロックなどの打楽器が、指定に関わらず全てフォルティッシモのように強く叩かれてしまっているという指摘があります。

- 強弱の使い分け: メゾピアノ(mp)やメゾフォルテ(mf)といった、譜面に書かれた細かな指定を忠実に再現してください。そうすることで、音色に「色合い(グラデーション)」が生まれます。
- 聴き手の意識を惹きつける: ずっと大きな音で叩き続けると、聴き手は飽きてしまいます。一度音量を落とし、「おや？」と思わせてから盛り上げることで、演奏がより魅力的に聞こえます。

2. チャイムの奏法と工夫

チャイムは音が長く残るため、扱いには注意が必要です。

- 音の長さとクレッシェンド: 音が混ざって不明瞭にならないよう、**「もっと短く」**叩くことが推奨されています。
- 方向性: 14小節から53小節にかけての長いフレーズでは、ピアノッシモからスタートし、最後に向けて確実にクレッシェンドしていく流れを作ってください。

3. リズムとテンポの安定

- テンポの乱れへの注意: 新人戦の時に比べて、215小節付近などで打楽器のテンポが乱れる傾向にあると指摘されています。特にティンパニなどは、周囲をリードする正確なリズムキープが求められます。
- 音量バランスの再チェック: 231小節付近など、他の楽器とのバランスを考え、チャイムなどの特定の楽器が突出すぎないように、スコアを読み直して音量を再調整してください。

吹奏楽を深化させる：野上先生の合奏・基礎合奏の極意



音楽に命を吹き込む「表現の対比」

徹底した「ピアノ」と「緊張感」の追求



単に音を小さくするのではなく、優しさや恋のある寂寥感をピアノで表現する。

聴衆を飽きさせない「著休め」の意識

常に全力（ステッキ）ではなく、静かな場面を作ることで音楽に劇的な変化を生む。



「楽講通り」への原点回帰

慣れによる演奏の崩れを防ぐため、改めて楽譜の指定を忠実に再現し再構築する。

アンサンブルの核となる「聴く力と息」

相手の「息のスピード」を感じ、合わせる
目に見えない息の速度を揃えることで、音色とピッチを自然に融合させる。



「ワンブレス」練習で振動効率を高める

一意で長く吹き切る練習を通じて、少ない息で効率よく振動を鳴らす感覚を掴む。



目的意識の共有と相互評価

「今、何を注意すべきか」を明確にし、昨日との違いをメンバー間で評価し合う。

